

萩にあしあと残そうよ

「特集：長州藩士の那須野が原開拓」

令和3年(2021)
7月15日発行
—第29号—
発行：大塚好一

昨年入会した史都萩を愛する会（事務局・萩博物館）では、会報誌「新・史都萩」を

年三回発行しています。少し前のことになりましたが、事務局の人とお会いした際、那須

地方を開拓した人々に萩出身者が数名いることを話したところ興味を示されました。そして「採否は理事会に諮ることとなりますが、会報誌に寄稿してみませんか？」という提案を受けました。

私自身も那須野が原開拓について学ぶ機会になるし、コロナ禍の中で休業も続いているので、取り組むことにしました。そして、那須野が原博物館から解説書を取り寄せたり、日本遺産ポータルサイトを見たりして、紹介する口調でまとめてみました。

掲載の採否はまだ分かりませんが、まずはこの場で発表します。萩市民になったつもりで読んでみてください。

『長州藩士の那須野が原開拓』 ～西洋式農場経営への夢～

◆はじめに

栃木県の那須と聞いて、皆さんは何かイメージが浮かぶでしょうか。そこは、広々とした田園風景が広がり、北から西には高い山が連なる風光明媚な地域です。山間部には湯量豊富な温泉地、高原地帯には別荘地やレジャー施設などがあり、首都圏を中心に観光客もたくさん訪れます。

さて、お勧めしたい観光スポットは山ほどありますが、ここで焦点を当てるのは「那須野が原」と呼ばれる扇状地についてです。この那須野が原には、次のような地名があります。三島・戸田・青木・品川、さらに加治屋・永田・豊浦など。これらは、明治時代にその地域を開墾した人々の氏名や住んでいた場所の地名に由来しています。「おや？」と思った方もいらっしゃるでしょう。

今回は、萩から遠く離れた那須野が原で繰り広げられた「明治日本の近代化への挑戦」について取り上げ、萩と那須との知られざる関係をご紹介します。

◆那須野が原開拓について

栃木県の北東部、首都東京から北へわずか一五〇kmの那須野が原：平坦で広々としたこの地は、明治期以前は人がほとんど住まない原野が広がっていたといえます。ここは国内でも最大級の扇状地であり、土砂や火山岩が厚く堆積し、中央部を流れる蛇尾川と熊川は、水が地下に浸透してしまいういゆる水無川となっているためです。広大な原野があっても、水がなくてやせた土地で、人々が暮らすのはたやすいことではありませんでした。

しかし、明治日本の近代化を確立する上で重要となった「富国強兵・殖産興業」政策が、那須野が原に鉄を入れる後押しをすることとなります。

萩藩（長州藩）などが「明治日本の産業革命」つまり工業の近代化に挑戦したように、北海道や東日本では、農業の近代化（欧米化）を目指して未開墾地の開拓が行われていたのです。

では、那須野が原開拓に挑んだのはどのような人々だったのでしょうか。もちろん土着の名士らも名を連ねていますが、着目すべきは、明治から太平洋戦争後まで存在した「華族」たちでした。

◆華族と農場経営について

華族は明治二年（一八六九）に作られ、昭和二年（一九四七）の日本国憲法の施行により消滅した特権的上流階級の称号です。かつての公卿と諸侯に加え、明治一七年（一八八四）の「華族令」により明治維新に勲功のあった人々を組み込み、公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵の序列が作られました。

華族は、生活の安定や体面を守るため、「華族銀行」といわれた第十五国立銀行への出資や日本鉄道会社の株式の取得によって、経済基盤を固めていきました。そして、武家華族や勲功華族の中には、官有地などを開拓して、農場経営を試み大地主となる人々も現れました。官有地は、関東・東北・北海道に多く存在していました。

那須野が原は、約一万一千町歩という広大な原野を有していたため、政府の目指す殖産興業政策に後押しされ、また東京から近距離という地理的条件も重なって、農場経営を目指す華族たちの注目を浴びることとなります。

資料によると、分割や継承も含み那須野が原では四〇の農場が開設され、うち華族農場は一九ありました。経営者を出身地別で見ると、山口県と鹿児島県が各六、佐賀県と高知県が各二などとなっています。ここにも明治政府の縮図が垣間見えます。

◆西洋式農場経営とは

明治政府は農業においてもいわゆる「お雇い外国人」といわれる技術者の招へいや、種子・種苗の導入、農具の輸入などを進めました。中でも力を注いだのは欧米式の農法

を取り入れた混合農業経営、いわゆる大農法による農業の近代化といわれます。

農場主が政府高官という構図の那須野が原の華族農場では、開墾と牧畜、植林を中心とする様々な試みが行われました。彼らには、若き日に留学先で目にした欧州貴族の荘園経営への憧れもあったのかもしません。

しかし、荒れた大地の開墾は容易でなく、多くの農場は採算を度外視した農場主の私財投入によりかろうじて維持されていたといえます。また、日本の風土に馴染みにくい大農法は定着せず、小農制へ転換した農場もありました。

◆現在的那須野が原

明治一八年（一八八五）に日本三大疏水のひとつ「那須疏水」の開削が始まりました。五か月間の工事の末に本幹水路一六・三kmの通水が実現、さらに総延長九六kmに及ぶ分水路や支線が開かれました。かつて不毛の大地と呼ばれていた土地に恵みの水が流れ、後には緑豊かな景色が広がるようになります。

栃木県の農業産出額は全国第九位です。そのうち主要農産物である水稲（同八位）や生乳（同二位）などについては、那須野が原が一大産地となっています。明治に開墾が始まり、その後戦後の農地解放により入植した人々の努力が実を結んでいます。

明治一四年（一八八一）当時、開拓地の住人はわずか二十五人だったそうです。そこに現在は十万人を超す人々が暮らすようになりました。これほどの発展を遂げるとは、当時の人々は想像することさえなかったでしょう。

◆長州藩士が開いた農場

ここからは、長州藩士（正確には山口県出身者）が開いた農場と、今なお残る痕跡等についてご紹介します。

【農場名】①開設年②開設者（爵位）③所有面積④概要⑤農場の痕跡等 ※写真は本紙用に裁き内の関連スポットを掲載。

【青木農場】

- ①明治一四年（一八八一）
- ②青木周蔵（子爵）



青木周弼・研蔵・周蔵の旧宅。
周蔵は研蔵の養子。

③一五八六町歩
④ドイツ貴族の経営する林間農業を実践し、森林の育成に力を入れました。森林は赤松と雑木林の混合林で、赤松は木材として雑木は薪や木炭として販売されました。明治二十一年に、農場内に洋風別邸を建設、平成一年に国の重要文化財となりました。

⑤旧青木家那須別邸と周辺は道の駅明治の森・黒磯として多くの人が訪れる場所となりました。別邸は内部も一般公開されています。また、市立青木小学校は、周蔵の設立による私立青木尋常小学校が起源で、後に公立化された珍しい学校です。秋には地域コミュニティによって「青木周蔵感謝祭」も開催されています。

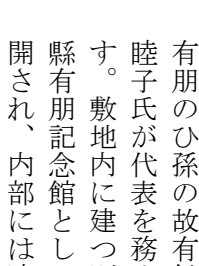


品川弥二郎誕生地は児童公園。

【品川農場（傘松農場）】

- ①明治一六年（一八八三）
- ②品川弥二郎（子爵）
- 平田東助（伯爵）
- ③二二六町歩

④留学中にドイツの信用組合制度について学んだ二人。あえて大農法ではなく在来農法を採用し、多くの移住者呼び寄せの中で、信用組合設立を目指したともいわれています。明治二十七年に品川信用組合（後に笠松信用組合）を設立しました。農場に枝ぶりのよい松がありシンボルとなっていたことから、傘松農場と呼ばれる方が一般的です。



門の跡が残る
山縣有朋誕生地。

【山縣農場】

※平田東助は米沢藩（山形県）出身で岩倉使節団に同行しました。ロシア留学後、弥二郎と青木周蔵の説得でドイツ留学に変更しました。後に弥二郎の養女達子と結婚しています。

①明治一七年（一八八四）
②山縣有朋（公爵）
③七六二町歩
④農場の立地が山地で起伏が多かったことから、林業を中心として植林・製炭が行われました。大正一三年に神奈川にあった別荘を事務所近くに移築しました。この洋館は、平成二年に栃木県有形文化財に指定されています。

⑤山縣農場は現在も存続し、有朋のひ孫の故有信氏の妻睦子氏が代表を務めています。敷地内に建つ別荘は山縣有朋記念館として一般公開され、内部には遺品や資

料が展示されています。なお、農場のある矢板市の特産品りんごは、有朋が青森から技師を呼び農場で栽培したのがルーツといわれています。

【毛利農場（豊浦農場）】

①明治一八年（一八八五）

②毛利元敏（子爵）

③一四三六町歩

④毛利元敏は長府毛利家最後の藩主です。明治元年に家督を継ぎ、版籍奉還で藩知事となり、藩は豊浦藩に改名されました。元敏は、明治一年に開設された県営那須牧場を継承する形で払下げを受けました。名称は那須農場・豊浦農場・毛利農場と改称されました。

⑤農場があつた一帯はJR黒磯駅周辺で、現在は那須塩原市の中心市街地です。

豊浦町や東豊浦などの地名もあり、人口の増加に伴い昭和四七年に新設された学校は豊浦小学校といえます。

【山田農場（黒田原農場）】

①明治二十一年（一八八八）

②山田顕義（伯爵）

③一一一町歩

④那須野が原から少し離れた場所にあつた官有原野に開設された農場でした。明治二四年に農場内に東北本線黒田原駅が開業すると周辺は市街地化していきました。農場事務所跡が残り、山田家の意向で山田資料館として公開されています。

⑤JR黒田原駅周辺には、那須町の主要な施設が集まっています。駅近くの音羽町は、顕義の東京の住所である小石川区音羽町から名付けられたといわれます。また、農場跡に建つ謝恩碑では、毎年秋に祖霊祭が行われています。



山田顕義誕生地（顕義園）は日大が管理。

【野村農場】

①明治二十二年（一八八九）

②野村靖（子爵）

③三七五町歩

④現在の大田原市寒井あたり

にあつた糠塚原という場所の官有原野を貸下げ、牧畜を中心とした農場経営を行ないました。約十年後に払下げを受けると、地元の実業家に売却し農場経営を終えています。（開設年は定かでない、二二〇二三年と推定されています。）

⑤短期間で農場経営を終え、また農場の詳細を示す資料が見当たらないことから、農場の痕跡等は明らかではありません。



入江九一（兄）と野村靖の誕生地。

◆日本遺産に認定

那須野が原開拓に関連する文化財等を有する栃木県那須塩原市、大田原市、矢板市、那須町は、日本遺産の認定を目指し、文化庁に共同して申請を行いました。そして、平成三〇年（二〇一八）五月に「明治貴族が描いた未来く那須野が原開拓浪漫譚（ろまんたん）」として認定されました。

日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するもので、ストーリーの構成要素となる文化財群を総合的に整備・活用することで、観光資源として積極的に国内外へ発信し、地域活性化を図ることを目的とするものです。

日本遺産の認定以前から、開拓の歴史は、小学生のうちから学び、語り継がれてきました。それぞれの地域では、前述のとおり開拓者への感謝の思いは今なお強く、この先も永く継承されていくことでしょう。

その中にはこのたびご紹介した青木周蔵、品川弥二郎、山縣有朋、毛利元敏、山田顕義、野村靖（農場開設順）の名が連ねられているのです。

◆むすびに

私の生まれ育った那須塩原市塩原は、那須野が原の西方の山中にある温泉場です。明治一八年（一八八五）、品川弥二郎は、溪谷に臨む景勝地に別荘を構えました。

その一角には、産業振興功労者の慰霊堂として念仏庵が建てられました。

後に、別荘跡地は温泉旅館となりましたが、念仏庵は取り壊されることなく、現在は塩原中心部にある妙雲寺境内に移築されています。

毎年五月、境内に色とりどりの牡丹が咲き「ぼたんまつり」が開催されると、念仏庵の戸を開けて、来場者をもてなす抹茶席が設けられます。平地と比べ、遅い牡丹の花を愛でながらの一服は、時の流れを緩やかにしてくれます。

「どうして萩に来たか？」と聞かれることがあります。私が萩を選んだのは、まったくの無縁ではなく、自然と導かれるものがあつたからなのかもしれません。

※参考・引用
那須野が原に農場を―華族がめざした西洋―（那須塩原市那須野が原博物館発行）、
日本遺産認定申請書類（日本遺産ポータルサイトより）

◎作成にあたり、那須野が原博物館のみなさまにお世話になりました。お礼申し上げます。

「萩に関する自由研究」

『後小畑町内の福聚院』

六月半ばの回覧板に、興味あるプリントがありました。萩博物館から後小畑町内会あてに届いた文書のコピーで、内容は次のとおりでした。

福聚院所蔵

『萩七観音詣奉納額』 借用および展示のお願い

本年、萩博物館において特別展「旅と人と萩と」を開催する予定です。この展示のなかでは、信仰の旅・巡礼を大きく取り上げる予定です。この展示内で「萩七観音詣」についても言及することを検討しています。

福聚院に奉納されている『萩七観音詣奉納額』は、今からおよそ三三〇年前の元禄六年（一六九三）、「萩七観音詣」の創始とほとんど時を同じくして作成されました。

「萩七観音詣」とは、元禄六年ごろに創始された巡礼で、萩城下町周辺の観音様を祀る

七ヶ寺を巡ることをいいます。福聚院はそのうちの一ヶ寺（五番札所）とされて多くの巡礼者たちの信仰を集めました。

以上の理由によって、貴重な文化財である福聚院所蔵『萩七観音詣奉納額』を特別展開催期間中、萩博物館にお貸しいただき、展示させていただきます。ご了承ください。

私が加入している後小畑町内会では、同じ敷地内にある「福聚院」と「三島神社」を管理しています。

三島神社では春と秋に例祭があり、引越して間もない時期に開催された一昨年の五月に、春の例祭に飛び入り参加して、神輿を担がせてもらった思い出があります。

一方、福聚院については月に一度、各組回り番で掃除をしているほかに、特に行事は実施していないようで、ほとんど知りませんでした。

そこで、図書館の郷土コーナーに見つけた「城下町萩の寺と人物・萩市寺院名鑑」を開いて調べてみたところ、次のことが分かりました。

◆福聚院（ふくじゅいん）



趣きある佇まい。

創建は弘仁二年（八一二）で、本尊は聖観音菩薩。指月山善福寺（臨済宗南禅寺派）に所属する観音堂です。

昔、唐船が後小畑に漂着したとき、その唐人が観音信者で、『堂を建立し観音を安置するから帰帆できるように』との誓願をしました。その願いがかなえられたので、地元の人に堂の建立を依頼したという縁起が伝えられています。



海を見下ろす場所に建っています。

なお、本尊の聖観音菩薩は秘仏で、古来二一年ごとに御開帳されています。次回は三年後の令和六年（二〇二四）に御開帳されます。

ちなみに、福聚院に向かって右下のお宅は、昔は殿様が通る時に休憩をする御茶屋だったそうです。今は砂浜を埋めて海沿いに国道が通っていますが、狭いこの道が、当時は本通りでした。

◆指月山善福寺について

善福寺は、室町時代の永享年間（一四二九〜四〇）に指月山の麓に創建された臨済宗の寺院です。慶長九年（一六〇四）に毛利輝元公が萩城を築城するにあたり、現在の場所（川島）に移されました。



松が見事です。

ところで、善福寺には天文一九年（一五五〇）の『大内義隆寄進状』が伝えられています。「土地を善福寺へ寄附させるので、早く寺務を始めなさい。」といった、土地の所有権を認めた（安堵）文書で、「萩」という地名が表記されたものとしては現存最古の資料といわれています。



キリシタン燈籠という説もあるとか。

善福寺境内の見どころの一つに織部燈籠があります。江戸時代初めの茶人古田織部が考案した石燈籠で、竿の部分が角柱状で、上部が分厚い円板状になっています。

「萩の五十音 おまけ」

萩の五十音については、前号で四四フレーズの紹介を終えましたが、創作のアドバイスを受けた際、高校の恩師から「ん」の句をいただきました。さすが、うまく締めることができました！

んっうまい！

いちいち しめちゃんまげびーる
一日のメチヨンマゲビール



左からアルト・ウィート・パールエール・IPA。